

01・誘い

私——大高（おおたか）夕季（ゆき）は今までの生きてきた人生で、絵を描いていてよかったと思う。

人に喜ばれるし、為になっていることに気持ちが満たされるからだ。リアルがつまらないから尚更そう感じる。

エロい話になってしまうが、自分のセルフ行為のおかずも描けるのが何よりも良い。

メジャーなものも好きだが、人間誰しもニッチな性癖をひとつやふたつを持っているものだ。

ニッチな作品にニッチなプレイは存在しないに等しい。昔色々嫌な思いをしたので、自分で描いて愉しんでいる。SNSやどこかのサイトにはアップしない。考え方が変わらない限りは。

男がやや嫌いなので、必然的に女かメスのキャラが対象となる。中でも一番好きなのは、中性的な顔立ちでサラサラのロングヘア。髪の色なんてなんでもいい。背が高く足が長くて、私よりも胸や尻が大きくて、ウェストは少し出てもいい。要は大きい体でギュッと包み込んでほしいのだ。

……まあ、そういうキャラはなかなかいないので、必然的にオリジナルキャラになってしまう。この名もなきキャラに弄られたり、もてなさ

れたりする妄想でひとりであるのが、大学に入ってからのも楽しみだ。

そしてこのときもじっくり時間をかけて勤しんでいた。いやらしい音が部屋に充満している。指を秘部に抽送するスピードを上げた。下の口が指をごちそうのように味わい、出し入れを繰り返すことによだれの分泌量を増やし続けている。

体中の熱が一気に高まった瞬間——そんなときに電話がかかってきたのだ。

「こんな夜中に誰よ……！」

もう少しで終わるところだったのに……！ 声にならない嘆きを全身で表す。ひどく害された気分になる。空いた手でスマホを取り上げ、無礼者の名前をにらみつけた。

そこには何年も会ってなかった幼なじみの名前があった。

* * *

電話が向こうで切れた。

大学は春休み中の期間である。単刀直入に「一緒に旅行に行こう」と電話で誘われた。一緒に行く予定だった友達が行けなくなったらしい。急な誘いに、面倒くささよりも驚きのほうが上回った。

「……今さら何よ」

考えさせて、と無理矢理会話を切断し、スマホを枕に軽く投げ当てる。今この瞬間、私の心の中はグチャグチャになった。

幼なじみとの関係は、幼いころは隣同士ということもあって、家族ぐるみの付き合いをしていた。生まれたときからいっしょ——ちなみに生まれた日もいっしょ——で姉妹同然に育った。なんならマンガやアニメでよくある窓同士で移動もして、朝昼晚いっしょに話したり、遊んだりもザラにある。

くだらないことから真面目な話、ふたりだけの秘密の話——ヘタしたら当時は、親よりも会話していたんじゃないかな。ホント、唯一無二の親友以上の存在。こういうとなぜか、

「セックスもしているんじゃないの？」

と、勘繰られるが、一度もしたこともない。プラトニックな関係だ。性欲なんて湧きやしない。だって、同性で幼なじみよ？ 今は同性愛に理解のある時代みたいだけど、奴にはあっても私はそんな気サラサラないから。断言できるもん。

幼稚園から高校まで共に歩んできた私たち。しかし今、大学は別々の所へ通っている。私は神奈川のほうへ。幼なじみは東京の大学へ。とうとう私たちは初めて離れ離れになる。

よほど楽しいみたい。進学してからパタッと連絡が来なくなった。どちらともなく、通話アプリで毎日のようにとりとめのない話をしていた

のに。

生きているのであろうにいきなりいなくなる。生身の痕跡がない。声も匂いも何気なく触っていた体も。死んだわけじゃないのにね。まるで記憶の中の人間になったみたいで、心の中にぽっかり穴が空いてしまった。

どうして私のほうから連絡しなかったのだろう？ 一時間も三十分も話す必要なんてない。軽くひと言「元気でやってる？」って聞けばよかったのだ。だけど、そのときは聞けなかった。

この蔑（ないがし）ろにされたことは相当効いた。そりゃ、傷つくわよ。

行動に移せなかったのは、私の頭にある予想外の答えが返ってくることを恐れていたのだろうと思う。

無視されることはないにしろ、自分の予想以上にあっちの環境に馴染んでいたらどうしよう。私なんかそのころは全然馴染めていなかった。

情けないやら、馬鹿馬鹿しいやら。マイナス思考とくだらないプライドが、幼なじみの存在を遠ざけていた。

私の中で幼なじみは、連絡先がわかるだけの死人と化してしまった。

しかし、大学生活は惨めで誇れるものがないから、話すこともない。それを遠ざけて話したとしても、結局は聞いてくるだろう。そうなったら、だんまりを決め込むしかない。そのときの私の気持ちを察してほしくない。同情なんてしなくて結構。

.....まあ、便りの無いのは良い便り、という言葉もある。幸い私にはSNSの別世界での交友関係もあった。だから、幼なじみに使っていた時間が、そっくりそのままそっちへ流れた。目を背けた。逃避である。目の端に映っていた幼なじみが消えた瞬間だった。

消えたはずだったのに.....。

続きをする気も失せた私はショーツだけ身に着け、ベッドに潜り込んで不貞寝した。

02・キザで白い

ここは山形（やまがた）県の天山（てんざん）駅前の駐車場の一角。レッドのコンパクトカーが目の前に停まったと思ったら、幼なじみが颯爽と降りてきた。駅のと鼻の先にあるレンタカー店で借りてきたらしい。

「お待たせ」

「……そんなに待ってないわよ」

結局来てしまった。好奇心と心の隅にある久々に会える嬉しさには逆らえなかった。なんでこんなに心臓がバクバクしているのかな。

約三年振りに会う幼なじみ——小野崎（おのさき）慧（けい）は、良い意味でも悪い意味でも変わり果ててしまった。

まずは良い意味から。所作に自信があるのだろう、鼻につく。私のことをレディとして扱おうとしている。もともと細身で背も高く、同性受けがよかった。自分でも自覚があって紳士のような存在になりたい、と、漏らしていたこともあり、大学で——慧のことをしつけができる——いいパートナーと巡り合えたらしかった。

次に悪いところ。嫌でも目につくのが髪の色。真っ黒だったのに真っ白に脱色されていた。眼にはカラコンが入れられ、右が深い青で左が赤。眉毛も必要以上に細くしちゃってもう……。まあ、眉毛まで脱色しなかったからよしとしよう。していたら、コンビニで黒マジックを買って塗ってくっていたところだったわ。

ちなみに、同じ新幹線に乗っていたのだが、席は別。私が自由席で彗は指定席。電話で何度かやり取りしているうちに、現地で会おうという話になった。私は別にどっちでもよかったんだけど。

しかし奴は、都会で去皮剥けてカッコよくなったであろう自分を演出したいのだろう。やり取りの節々に腹立つワードが散りばめられていた。正直、嬉しい気持ちはあっちから電話がかかってきた一回目で霧散していた。

ああ、コイツは変わってないなと。そのときは安堵と呆れの感情を持ったものなんだけど。

.....実物を見た今となっては、腹立つぐらいカッコよくなってしまっている。男物っぽい黒の地味なパンツスタイルのファッションに身を包んでいても、負けずに着こなしているし。

他人からパッと見れば、中性的な男にも見えかねない。が、コイツはカッコつけのボクっ娘である。胸は平たいが、男ではない。ついてないし、ないものはない。小太りの男といい勝負かも。私より遥かに小さい。あえて何がとは言わないが。

正面から見れば前髪はやや短く、髪留めをしている。それに伴いショートカットかな？　と思いきや、うなじの辺りでお団子にしている。どうしたことだろう。なかなか不思議な髪形をしている。何も、女子力をすべて失ったわけではなさそうだ。

.....どこからツッコんだらいいのかわからないので、今はあえてツッコまないことにする。呆れたのもあるけど、さっさと旅館に連れて行っ

てほしい。寒いし。

「相変わらずなのね」

吹っ掛けるような物言いにも、彗は小首をかしげるだけだ。

「何がだい？」

「何もかも、よ」

有言実行できて輝いている幼なじみに対する負け惜しみである。

「あははは、そうなんだ。まだまだ精進が足りないってことか。がんばるよ。でも、キミはとても素敵になったよ。ボクはそれが嬉しい。茶髪のツーサイドアップなんて大好物だし、吸い込まれるぐらい黒い瞳も、歳を重ねて磨きがかかっているようにも見えるよ。それと……」

めちゃくちゃ褒めてくる。髪に隠れていてあまり見えない翠色のハートのイヤリングも、ナチュラルな色のリップも見抜いてしまう。千里眼の能力でも所持しているの？

「ねえ、早く行かない？」

歯の浮くような褒めっぷりが腹が立ってしょうがないし、寒くて芯まで冷えて来たし、半ギレ気味に吐露してしまう。

「まあまあ」

それに何その余裕たっぷりの微笑み。これじゃ、私が惨めったらしくてバカみたい。だけど、素直になりたくないし、なれない。この悔しさ

が先行してしまうのと、空白期間でできた溝が埋まらない現状じゃあね。

荷物をレッドのコンパクトカーに詰めて、ようやく私も乗り込んで、出発。颯爽と街中を抜け、天山市内の南東のほうへ向かっている。

私はよく調べてないのだが、そっちのほうに温泉街があるらしい。

山道の道路の両側は、残雪混じりの山の斜面が延々続いている。せり出した木々にも葉のひとつもついていない。もう少し暖かくなれば、青々としたものが見れるのかも。まだ三月だし、北国だしね。生命を感じられるのはまだまだ先だろう。

「今も描いているのかい？」

一瞬会話が途切れたと思ったら、私の核となる質問が飛んできた。互いの近況をサラッと話していた今さっきと違い、若干硬く、確かめるような口調だ。

「もちろん、描いてるわよ。好きな絵を好きなだけ描いているわ。ひとりの時間が多いし」

「夕季は幼稚園のころから絵が上手だったね。それが今でも続いているのは凄いよ」

安堵感を全面に押し出した声音で褒めてくる。ただし、表情は変わらずだ。

「ただの自己満。完全に我流だし。でも、相手が喜んでくれているから、それでいいかな」

「相手？ 誰かに絵をプレゼントしているとか？」

「大学に入ってから時間ができて、ネットの小説を読むようになったのよ。おもしろかったり、キャラが魅力的だったら描いて送っているの」

嫌味を織り交ぜているけど、きっと気づかれないだろうね。

「へえ、その作者さんは跳び上がるほど嬉しいだろうね」

でしょうね。はいはい、予想通り予想通り。

「そうかな。本心からそう思ってくれていれば、いいんだけど」

「思うよ、思うって！ 夕季の絵はプロにだって負けてないんだから、自信持って！」

「……まあ、お礼に物資が贈られてくるから、自信持っていていいのかもね」

「え、それはもうプロじゃないか。凄い凄い！ 幼なじみがプロなんて、ボクも誇らしいよ」

「いや、だからまだプロとかそういうアレじゃ——」

「久しぶりにボクのこと描いてほしいな。昔はよく描いてくれたよね」

聞いちゃいないわコイツ。つーか、それをいうのはもうちょっとわだかまりが解けてからにしようよ。ま、コイツ自身は何も変わってないと思ってんだらうね。今の一連の会話で違和感を覚えなかったなら、相当ニブイよ。

「どうかな？」

「ずうずうしい……まあ、いいわよ。そうねえ、ヌードモデルでもやってもらおうかしら」

片頬がつり上がる。我ながら意地の悪い笑みを浮かべているのがわかる。不意に彗の困った顔が見たくなかった。自信が体中から漏れ出ていて、当然顔にも出ている。そのにこやかな顔をちょっとでも崩したかっただけなのだ。

「いいよ。最近は鍛えてて、自信があるんだ」

笑顔で即答かよ。筋トレ万能説かよ。そりゃ、自信満々になるわ。こっちなんかお腹周りがデングャーゾーンに差しかかっているのに。

結局、困らせるつもりが、逆にこっちが面喰らうのね。いいのいいの、昔からどうせいろんな面でコイツに敵わないんだから。唯一勝てるとしたら、絵の巧拙ぐらいなものだし。

「……？ どうしたんだい？ ほっぺを膨らませて」

「なんでもないわよ！」

「ふふ、急に不機嫌になるところは変わらないみたいだね」

「ええ、どうせユキは子どもですよ。一人称も変える気ないもん」

大嘘である。大学入学時にがんばって"私（わたし）"に改めた。県外の大学は今までの環境と違ってアウェーだ。しかも通っていた高校から私しか行かないから、異国にポツンとひとり投げ出されたようなものだ。個性で挑む自信などなかったから、没個性でいこうと思った。

中・高校時代に一人称を矯正しなかったのは、幼稚園や小学校のころからの顔なじみが多かったからである。私自身も幼いころから名前呼びで来てたし、周りの家族や友人もだけど、それが自然で違和感がなかった。周りの環境が優しい世界だったからする必要がなかったのである。

.....ああ、一般的にはだいぶ痛かっただろうなあ。

「羨ましいよ。自分を持っていてさ.....」

慧の言葉のトーンが下がり、一瞬影が差したように見えた。しかしそれはすぐに終わった。『天山温泉郷はこちら！←』という大きな縦看板を見つけたからである。